
 〈書 評〉

監修：大島 良雄（東大名誉教授），山田 憲吾（徳島大教授）

編集：佐々木智也（東大助教授），野島 元雄（徳島大助教授）

リハビリテーション処方集

横浜市立大学教授 土 屋 弘 吉

本書は「処方集」という名が冠せられているが、実は大へん懇切丁寧に書かれたリハビリテーション入門書である。ただ一般の入門書と異なり、「処方」というアプローチを通じてリハビリテーションの技術を解説し、ひいてはリハビリテーションの理念を理解させるという、いわば捌手からの攻め方を採用していることが特徴で、そのために記述が具体的、实际的、例示的である。

たとえば、脳卒中後麻痺についていえば、まず概論の中で機能判定の基準、分類、処置の実際、リスク管理、P.N.F. などについて述べられ、ついで片麻痺の臨床分類では実際の病例が提示され、それについて、

処方 1（10月30日）

1) 血圧管理

2) 体位変換、少なくとも 2 時間ごとに、

3) 良肢位保持、

のごとく処方例が示され、その後の経過の説明があった後、

処方 2（11月4日）

4) 筋力テスト、Brunnstrom テス

ト、

5) 介助により 坐位とし、背部支持で座位保持、時間をしだいに延長するとともに支持を減らしていく、

6) 関節可動域訓練、筋力強化訓練（P.N.F. を加えた P.R.E.）のごとく例示し、その後に 1 頁にわたり詳しい説明を加えている。さらに 11 月 11 日には処方 3 が出され、11 月 15 日には 短下肢装具が処方され、12 月 24 日の処方 4 で杖なし歩行指示、復職の前段階まで記載しており、その後はこの症例のまとめを書き、この項に必要な参考書を紹介している、

この体裁は必ずしも報筆者によって一様ではないが、共通していることは、まず病像が示され、ついで症例の提示があり、リハビリテーションの処方におよび、経過を追って処方の内容を変えていく過程が示され、その間に实际的な説明が豊富に加えられている。各項目毎に参考書を紹介していることも誠に親切である。執筆陣の方々はわが国のリハビ

リテーション医療の第一線にあって多くの臨床経験を積み重ねつつあるパイオニアであると同時にベテランであり、その豊富な経験に基づく含蓄のある記述は本書を非常に読み易い面白いものになっている。

監修者は序言の中に、「本書は…（中略）…多数の実例をあげて説明を加え、処方をきめる手順をふむことにより、リハビリテーションの原理のみか、きめの細かい实际的具体的な指導を目標として編集された」と書いているが、監修者の意図は所を得た執筆者の選択によって十分に実現されたことが認められる、

リハビリテーションに日常従事する医師やパラメディカルの人々の座右の書として、またリハビリテーションに関心を有する実地医家のための参考書として、さらにこれからリハビリテーション医学を修得しようと志す人々の入門の書として広くお薦めしたい良書である、

A 5・630 頁・図 101・写真 168

¥5,600 円 200

 医学書院刊
